
本当にあった飛び降り事件

(` ' 僕`)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当にあつた飛び降り事件

【Z-ONE】

N4195D

【作者名】

(一)、俺、(一)

【あらすじ】

小学生時代にあつた、嘘のよつで残念ながら本当にあつた事件のお話

(前書き)

勢いでやってしまった、今は反省している。でも後悔もしている。

小学生にとつての友達の価値観なんて物は、一緒に遊んでいて楽しいか楽しくないかのどちらかで決まる。

誰だつて一緒に遊んでいて楽しかつたらまたその人と一緒に遊びたいと思うだろうし、普通だ。

逆に楽しくなかつたら次はその人と一緒に遊びたくないと思うのが普通だ。

ちなみに僕はその内の“楽しくない”と思われる分類の子供だったらしい。

まあ少し理由を話そう。

当時の僕は生れ付き足が弱かったのもあり、鬼ごっこやサッカーが苦手だった。

それにドッジボールやキャッチボールもボールがとれないうえに的

が大きい……要は太っていたので当たられ易くて嫌いだった。

……と言つたか運動系の遊びは殆んどが大嫌いだった。

うん、だつて疲れるし。

それに僕は性格にも問題があつたんだ。

僕は太つていた……つと言つても今も太つてゐるけどね。

まあそんなデブがクラスの中に一人でも居たら子供たちはどうするかな？

そりやもちろん馬鹿にするよね。デブだの豚だの色々言つてね。

でも所詮は子供の言つ言葉、笑つて誤魔化せばいい。

だけどよく考えてほしい。当時の僕もまだ“子供”だ。

僕はその“デブ”だの“豚”だの言われるのが大嫌いだったらしい、何故かムキになつて言い返してたらしい。

そしてそれを面白がつてまた馬鹿にしてくる奴らが居るもんだから僕は……

泣きながら暴れて、
周りに物を投げて、
誰かを怪我させて、
先生に怒られて、
さうして家に帰つて親に怒られる。

何で」とをよく繰り返していた。

今思つと小学校の頃の先生は火の元の生徒より爆発元の僕ばかり
起じつてたな……

まあそんなことは置いといてさ。

こんな迷惑な糞肉餓鬼なんかと遊びたいと思つ物好きなんか居るわ
けないよね（笑）

そんなこんなで小学生の僕には友達と呼べる友達が殆んど居なかつ
たつてことや。

つと、ここで話を題名通りの本題に入れるが、その事件は僕が小学校四年生の時に起きた。

と嘘つか起じした。

僕こといつての四年生の時と嘘つかのはあまり良いことがない頃であつてね。

何故ならその年の同じクラスには僕の苦手なタイプの人間が多かつたからなんだ。

まあ今までの学年（一年、二年、三年）の時も居たっぢや居たけど

……

四年生の時はさう、数少ない友達も特に少なかつたんだよね。

あ、因みに僕の苦手なタイプの人聞つて言つのはね。

人の事をバカにして笑いを取るのが大好きで相手の気持ちを気にしないような奴や、

ルールを破るのがカッコいいなんて思つているような奴、

とかのこと。

まあ今ならそんな奴らの事も笑つて誤魔化すことが出来るけど、

何せ当時の僕は馬鹿正直な餓鬼だ。

笑いのネタにされればマジギレしてたし、

ルールを破つている奴を見たらわざわざ先生にチクつたり、

授業中に五月蠅かつたら勝手に注意なんかしちやつてたんだよね。

他の奴らからしたら僕の方がウザイって言うの（爆）

話がずれてしまったので元の話に戻そう。

とりあえず苦手なタイプの人間が多くたその時は毎日ストレスを溜めがちだった。

さらに家に帰つてもその頃は特に両親の喧嘩が激しい時期で家でもストレスが溜まりっぱなし。

今考えるとあの時は結構な鬱状態だったかもしれないや……

そんな状態で事件の日は来た。

その日もいつもの様に朝に学校に登校したが、先生の用事で朝の会（高校で言うショートホームルームの時間）が自習の時間になつた。

しかし、周りの奴らは所詮小学生なんだから自習の時間なんか静かに過ごすわけがない。

だけど僕はそれがとても気に入らなくて少し大きな声で。

「静かにしろよ！」と言つた。

でも周りの奴らが静かになる雰囲気はない。

もう少し大きな声で

「だから静かにしろよ…！」と言つ。

聞こえた奴が何人か居たみたいだが、「またか……」といった顔をして無視をする。

そこでキレた僕は完全に公害レベルの声で。

「静かにしろって言つてるやろが
あああああああ！」

と言つた。

いい忘れてたけど、実は僕関西人ね

まあそんな鼓膜が潰れるような声出されちゃ他の皆も黙っちゃいな
い。

クラス全員で

「お前の方がうつさいんじゃボケ」
だの

「もっと小さい声で言えやデブ」

だの

「豚は静かに勉強してる」

だの集中砲火ですよ。

一回田の言葉は毎回言われるけど俺が最初小さめの声で注意してたの知らないんかな……

つとまた話が脱線したが問題はその後。

何故か知らないがクラスの皆の言葉がいつもより酷くなつていった。

「つーかお前ホントウザいんやけど、死んでくれん?」

「ホントや、死ね死ね」

『しーね、しーね、しーね』

なんか死ね死ねコールが出来上がりつてた。

自習の時間で先生も居ないのでそのコールはずつと続く。

男も女も関係なくみんなで仲良く死ね死ねコール。

そしてそれを受けるのは僕。

子供つて言つのは簡単に死ねと言つかり困る。

まあ本心じゃないんだろうけど。

でも当時の僕は本当に悲しかったね……

だつて死ねだよ？ しかもクラス全員で？

その時の僕は学校に居ても楽しくないは家に帰つても家族はギクシヤクしている状態。

しかも家でも家族の内扱いは悪い方だった。

まあその頃三兄妹だったんだけど、

長男である兄貴は初めての子供。

長女である妹は初めての女の子。

そして次男である僕は一一番田の男の子、一一番煎じであるわけだ。

親も意識はしてなかつたかもしけないが、やっぱり僕にだけは態度が冷たかっただと思う。

だからその時僕の頭の中には“生まれてこない方が良かつた”何て
考えが入っていた時期だった。

そんな時に皆に“死ね”何て言われるんだよ？

「じゃあ本当に死んでやうつって気分になつちやつた、テヘッ

教室を飛び出した僕は同じ階にある渡り廊下に出た。

僕の学校の渡り廊下からは屋上に繋がつててね、そこから僕は屋上に移り飛び降りる準備をした。

でも、まだすぐにほ飛び降りない。

何故なら、その時の僕の頭には完全に“死んで他の奴らに言葉の重さって言つのを思い知らせてやるつ”といったことでいっぱいだった。

だから皆が追い付くのを少し待つた。

案の定渡りしばらくしたら廊下には野次馬がいっぱい来ていた。

クラスの奴らから隣のクラスの奴ら。そして他学年の人たちまで来ていて。

ステージは完全に出来ていた。

そして僕はそれを確認して飛び降りた

ら良かったのにね。

そうさ、僕は飛び降りれなかつたんだ。

でも、別に怖かった訳じゃないよ。

ただあることが原因で飛べなかつたんだ。

まあそれも込みでその当時の僕に視点を移してこの話を終わらせたいと思つ。

あとついで過去の僕、
後は任せたＺＥ

うわ、ちゅ、キモッ！

なんか今キモいメッセー‌ジみたいなのがボクの頭に来たんだけどー。

まこっか、そんなことよつ早く死んで楽にならひ。

あー、思えば楽しくない人生だつたなー。

つて言つてもまだ10年しか生きてないけど。

よつち園の頃からイジメられたわ孫でお父さんとお母さんは“つこん”する“つこん”あるたわこでるじ。

何もいいことがなかつた気がするなー。

あー、でもゲームしてると結構楽しかったな。

後マンガ読んでもらおむ。

やつぱりあのマンガまだ終わってないから続き読めないや。

あー、読みたかったな。

いや！ ボクは死ぬんだ！ そんなこと忘れるんだーー！

あつ、やつとみんな来たや。

はははは、アイチホントにこんな事するなんて思つてなかつたから
おどりこしてやがる。

じやあ後は飛び降りるだけだな。

あー、お父さん、お母さん、そしてクラスの奴ら。

ひむなり自分をつりこんでね。

じやあよひなう。

！ つ

！ ま

！ て

！ え

え

え

え

え

え

い

い

い

つ

！

！

うわあ…………よくよく考えたら一階から飛びおりてもそんなかんたんに死ねないじやん…………ただ痛いだけじやん…………

ああー、四階に行こうにも人いっぱいいるしもどれねえ…………

ん?

「うはwwwマジでwwwヒヤッホーイwww」

『しーねWWWしーねWWWしーねWWW死んじやえーWWWW』

普通にいつこいつがいつかねの時は止めない！？

つーかおいー 他学年の奴まで一緒になつていつてんじやん！？

何でだよ！？

ボクあんたの顔知らないよ！？

なんかここで死んだら逆にひばられるような気がしてきたや
これじゃ後かいさせてやるうつていう計画が亡無じやん
……

かっこいいや
死ぬの止めよ

そして僕はこの後クラスの皆から

「怖いから死ねんかったんやろ~

だの

「死んでほしかったな～」

だの言われ、余計に色々言われるようになり。今でもネタにされる
ようになつましたとや。

~~~~~(終わり)~~~~~

(後書き)

あれから数年間、一応自殺未遂もなく僕はなんとか生きています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4195d/>

---

本当にあった飛び降り事件

2010年10月15日23時16分発行